れきみんミュージアムノート

－Rekimin Museum Note－

Vol.1「博物館の女神像について」

はじめに

当館のエントランスロビー奥の庭に、右手にトーチを掲げた女神のコンクリート像がたっていることをご存知でしょうか。

像高は3.45メートル、球型の台と合わせると、約4メートルの高さになるこの「女神像」は、大正時代に製作されたもので、紆余曲折を経て、昭和52年（1977）6月に、当館の庭に設置されました。今回はこの「女神像」の受難と流転について、少しだけ紹介します。

【女神像】

1　成立と受難

「女神像」の作者はわかっていません。一説によれば、東京美術学校の学生が作ったのではないかと言われていますが、詳細は不明です。

大正15年（1926）11月6日、裕仁親王（後の昭和天皇）御成婚記念として着工された埼玉会館が竣工しました。設計者は大正から昭和期に活躍した建築家の岡田信一郎で、本館（平屋一部2階）と別館（地下1階、地上3階）からなる近代建築となっていて、入口には会館の建設に尽力をした、渋沢栄一が揮毫した館名を記した、青銅の銘板が掲げられていました。

【旧埼玉会館銘板（当館蔵）】

「女神像」は、この埼玉会館の屋上に設置するために制作されました。当時の新聞には「平和の女神」と書かれています（「東京日日新聞埼玉版」大正15年11月9日付）。竣工当時の様子は、開館記念に作成された絵葉書に見ることができます【図1】。写真の様子を見ると、周囲からも目印になるような華やかな場所に位置し、埼玉会館を象徴するように、「女神像」が立っていたことがよくわかります。

【図1「御成婚記念埼玉会館竣工記念　絵葉書「埼玉会館前景」」】

ところが、このように目立つ形で置かれたことが「女神像」にとっては裏目の結果となりました。竣工からわずか3日後（大正15年11月9日）の「東京日日新聞埼玉版」に、県会の「元老議員」が、会館の屋上に「全裸の像」が設置されていることへの問題が提示されていることが報じられました。同月18日には、県会において、立憲政友会の県議を中心として「女神像」は“風教上問題である”とやり玉にあげられ、当時の齋藤守圀県知事が「閉会までに何とか返答する」旨を答弁するに至りました（「同」大正15年11月18日付）。

これには埼玉会館の設計者岡田信一郎も憤りを示し、当時の新聞も「チョンマゲ流の県議員」と旧態依然を風刺しました（「同」）。また新聞社が独自に県庁職員へ行った存否のアンケートでも、「存続93、撤廃25」という結果になったようです（「同」大正15年11月20日付）。しかしながら、12月になって「女神像」の“撤去”が決定されました。そして翌年（昭和2年）2月19日に撤去は実行され、設置からわずか約3ヵ月という短い期間で、「女神像」の埼玉会館での生活は終わりを告げたのです。

２　女神の流転～そして博物館へ

埼玉会館から降ろされた「女神像」は、ひとまず大宮の旧武州銀行構内に置かれていたようです（「同」昭和2年3月24日付）。しかしながら、このことが新聞で報道されていたことも影響したためか、撤去された「女神像」を引き取りたいという希望は、長瀞の保勝会や熊谷測候所など、あちこちからあがっていたようです（「同」昭和2年2月26日・3月9日付）。その中から、最初に手を挙げた県会議員加藤睦之介が、将来的には大宮町役場の屋上に設置をするという見込みで引き受けることになります（「同」昭和2年2月27日付）。ここから、女神像の流転が始まりました。

その後しばらく「女神像」の行方はわかっていません。「毎日新聞埼玉版」（昭和52年（1977）2月5日付）によれば、大宮球場付近の料亭に飾り物として置いてあったとか、加藤氏が倉庫で保管していたとも言われていたそうです。結局のところ、大宮町役場で日の目を見ることはありませんでした。そして昭和23年頃になって、加藤氏と懇意にしていた料亭「清水園」の社長が女神像を譲り受け、園内に設置されることになりました。

昭和50年（1975）になって女神像は再び話題にあがります。埼玉会館の50周年の記念に、埼玉会館に復帰するプランが浮上したのです。この間、同館は昭和41年（1966）に前川國男が設計を手掛けた新館となっていました。しかし、移転にあたっての調査が行われたところ、移送に問題があることがわかりました。

昭和52年3月、女神像は埼玉県に寄贈され、県施設に移転するという話がまとまりました。そして最終的な移転先となったのが、清水園からは移送距離も適当だった、埼玉県立博物館（現埼玉県立歴史と民俗の博物館）だったのです。同年6月、ついに「女神像」は再び県民の前に姿を現すことになりました。

おわりに

博物館に設置された後も、実現はしませんでしたが女神像を旧浦和市内に移転させたいという動きもありました。

竣工時には一部議員からの批判にさらされた「平和の女神」は、2026年で恐らく100歳の節目の年を迎えます。大正期の論難を経て、当館の庭先にたたずむ女神は、いったい何を思っているのでしょうか。

（常設展示・資料担当　駒見 敬祐）